

日介連ニュース

巻頭挨拶

日本介護事業連合会の会員の皆様へ 日本介護事業連合会 会長 愛知 和男

いよいよ第 25 回参議院議員通常選挙が 7 月 21 日に実施されます。マスコミ各社が序盤の情勢を分析したところ、自民・公明の与党が優勢であるように言われています。しかしながら、結果が出るまではどうなるか全く分からないところが選挙の恐ろしさです。私も嫌というほど経験してきたものです。決して安心できるものではありません。

また本選挙では私の地盤である東北宮城の地が大変な接戦となっております。私も現在宮城に張り付き県民・国民の皆様にお願いをしているところであり、最近の不義理をご容赦いただきたく存じます。皆様のご指導をお願いすると同時に、選挙が終わりましたらあらためてご挨拶をさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。



日本介護事業連合会
会長 愛知 和男

ヘッドライン



慢性腎臓病セミナー「あなたの腎臓を守るために」ご報告

活動報告

「平穏死」を迎えるために延命至上主義からの脱却を（抜粋）

2019 年 2 月 26 日、3 月 5 日号のエコノミスト誌に日本介護事業連合会の理事である石飛幸三先生の二回にわたる連載が掲載されました。日頃からご指導いただいている石飛先生は、飾り気のない素晴らしいお人柄です。その先生との会話から学んだことを含めて事務局の堀田がその抜粋ならびに要約したものを活動報告として執筆したいと思います。

我が国の総人口は、2017 年 10 月 1 日現在、1 億 2,671 万人です。65 歳以上人口は、3,515 万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）も 27.7% となっています。65 歳以上人口は、1950 年には総人口の 5% に満たなかったのですが、1970 年に 7% を超え、さらに、1994 年には 14% を超えました。高齢化率はその後も上昇を続け、27.7% に達しています。

日本は年間の死亡者数がすでに 130 万人を超える世界でも有数な超高齢化社会になっています。人生最後の迎え方がその時代の文化を示すとも言われています。よって日本がこの点にどのような取り組みを行うのかは、実は世界が注目しているといっても過言ではありません。

石飛先生は 50 年にわたり血管外科医を務めてられました。ある医師から教えてもらったのですが、先生の腕前は有名で、新人医師の間では憧れの医師であったそうです。まさしく手術の鬼だったのです。先生は私によく「私は部品屋だった」と言う言い方をされます。それは手術を通して身体の一部の修理をしていたに過ぎないのだ、という意味なのです。「小医は病を医す、中医は人を医す、大医は国を医す」と言いますが、先生はきっとそのようなありようが見えてい

たのだと思います。自らのなされてきた素晴らしい業績をいとも簡単に否定して更なる進化を遂げようというその率直な姿勢に共感をもたれる方が増えていきます。私もその 1 人です。

先生はこうも言われます。「これまでの医療のビジョンは延命至上主義であった」と。もちろんこのことは国や国民が若いときには正しい姿であったでしょう。しかしながら日本社会の高齢化が進み老化によるがんや動脈硬化など治せない病気も増えてきました。そうするとそのありようも変えないといけなはずなのです。このことに気づいた先生は 70 歳の時に入所者の終の棲家となる特別養護老人ホームの常勤医に転じました。NHK を始め様々なマスコミで取り上げられている世田谷にある芦花ホームです。先生はそこで様々な気づきを得ることになる利用者さんや家族との出会いをもちます。

一つは、2000 年の三宅島噴火で避難してきた認知症のおばあさん、その方が入所 5 年目を過ぎた頃に誤嚥して肺炎を併発したときのことです。

口から食物を摂取できないため経鼻胃管で栄養補給したところ島から来た息子さんが泣きながら先生に訴えたのです。「島ではこんなことはしません。水だけそばに置いておきます。本人に生きる力があれば自分で手を伸ばして水だけ飲んで 1 ヶ月は生きて」と。

後からわかることですが、自然死の場合は自然の麻酔がかかるのです。徐々に食べなくなって最後には水分も栄養も受け付けなくなって、眠って、眠って苦痛なく旅立たれるのです。食べなくなると言うのは体の中の余計なものを片付け捨てて、捨てて身を軽くして

天に上るためなのだと思います。水分をほとんどとっていないと言うのに最後まで排泄があるのです。説明のつかない自然の摂理がなされるとしか言いようがない気がします。

二つ目は、2005年に介護施設に赴任したばかりの先生が初めて家族会に出席したときの事です。70歳過ぎの初老の男性が「この前も言っただろう、いつになったら直すんだ！」と声高に叫ぶのを聞いたそうです。この方を当初、施設ではクレーマーと思っていたのですが、でも本当は素晴らしい夫婦愛を持たれた方だったのです。

このご主人はアルツハイマー病を患い人生の坂を下る8歳年上の女房であるマツさんを自宅で18年間たった1人で世話してきました。ご主人は介護を通して悲しいけれど奥さんの食事の量が減り日々、衰えていくことを当然のこととして受容していました。そしてやっと芦花ホームに奥さんを預けたところ、その介護職員たちが1日1500キロカロリーの決まった量の食事を機械的に与えるのを見て、愛妻が無理に食べさせられていると思って声を荒げたのです。

もちろん介護士は一生懸命でした。しっかり食べさせることが自分たちの仕事だと信じていました。かたや奥さんは食べ物を飲み込む嚥下機能が衰えていきます。衰えていく体力に介護士は気が気ではありません。食べさせなければならぬ、でも誤嚥したらどうしよう。ハラハラドキドキしながら介護士は自分たちに求められている介護業務を必死にこなしていたのです。ご主人も必死、介護士も必死、お互いが同じように必死だったのです。

しばらくして先生はこのご主人と腹を割って話されるようになります。すると何が問題なのか次第に見え

てきました。前述のようにご主人と介護士の老衰に対する受け取り方の事例が問題だったのです。そしてご主人が指摘した問題は超高齢社会のわが国における医療のあり方の問題だと先生は気づきます。それはまさに老衰にどこまで医療を施すかを問うことでした。

間もなくご主人の心配が現実のこととなります。奥さんが誤嚥して病院に運ばれました。ホームでは医療行為ができないためです。病院には外科手術で胃に穴を開けて栄養分を直接補給する「胃ろう」を勧められました。しかしご主人はそれを断り先生も呼ばれてご主人と一緒に奥さんをホームに連れ帰ってきました。

マツさんは1日わずか600キロカロリーの食事をとり続け、それから1年半も生き続けました。再び誤嚥性肺炎を起こして入院し入院先の医師は今度こそ本当に食べられないからと「胃ろう」を強く勧めましたが、ご主人はきっぱりと断ってマツさんをホームへ連れ帰りました。

マツさんはもう水さえ受け付けません。目を覚ますことなく眠り続けました。そして10日後、まるで眠りの続きを微睡むように、そのまま静かに息を取りました。それは先生が初めて目の当たりにした自然な最後でした。先生は何もしないこんなにも穏やかに行けるのか、この素晴らしい自然の最後の仕組みはまさに神の恩寵だと思ったと執筆されています。

「食べないから死ぬのではない、死ぬのだから食べないのだ」と言う三宅島に伝える考えをマツさんの旅立つ姿と重ねあわせてここに真実があると知ったと言います。そしてこのご主人の究極の愛があったことも。

先生はその後、芦花ホームで穏やかな自然な老衰死をみてこられました。それを「平穏死」と名付けたのです。その講演回数はすでに800回を超えました。

活動報告

慢性腎臓病セミナー「あなたの腎臓を守るために」

主催：NPO法人腎臓サポート 後援：日本介護事業連合会（6月9日開催）

NPO法人腎臓サポート協会主催によるセミナーが開催されました。

腎臓サポート協会は長年に渡り、腎臓病患者はもちろん、そのご家族へのサポート活動、一般への未病に関する普及啓発を行っております。当会は運営補助として携わらせていただきました。

セミナーでは、腎臓病となった際の治療方針や腎臓病となる前の段階で個人ができる対策についてご講演いただきました。後半のパネルディスカッションでは、実際に透析、移植を受けられた患者さんにご登壇いただき、実際の生活面だけでなく、人生設計における心情など、患者さん目線の思いをお聞きする事ができました。当日は日曜日にも関わらず約200名の方達にお集まりいただき、大変、熱の入ったセミナーとなりました。



パネルディスカッションの様子

編集後記

活動報告において述べた「平穏死」。誰もがそのことを望むのではなく最後まで徹底的に医療的な施しを受けたいという方もいらっしゃるでしょう。そこには様々な選択肢があり、またそれを選択できるようにすることが必要なように思います。しかしこのことは、本人の選択ではなく、アジア圏である我が国においては、本人の選択以上に家族の選択が優先されるという

特徴があります。本人が延命処置を拒んでも、その別れを望まない家族は延命処置を望むこともあるでしょう。このことは家族における「愛」があるからこそ、ことです。否定することはできません。だからこそ、家族に対するこのような考えの啓蒙も必要だと感じます。日本介護事業連合会はそのような啓蒙活動にも力を入れていく所存です。